

# □ オーケストラ

## 東条 碩 夫

### ●先達作曲家たちの名作を復権

日本フィルが山田和樹の企画と指揮で演奏した、柴田南雄の交響曲「ゆく河の流れは絶えずして」を含む「柴田南雄生誕100年・没後20年記念演奏会」(11月7日)が、平成28年度文化庁芸術祭大賞を受け(受賞者は同演奏会実行委員会)話題を集めた。山田と日本フィルは同演奏会で「ディアフォニア」をも演奏、また9月にも「コンサート・オブ・オーケストラ」を取り上げるなど、柴田の作品に光を当てるのに尽力した。新日本フィルも下野竜也の指揮で三善晃の「管弦楽のための協奏曲」、矢代秋雄の「ピアノ協奏曲」、黛敏郎の「涅槃交響曲」を好演(5月)したが、これらがわが国の先人作曲家たちの名作を現代の聴衆に知らしめるよい機会となれば幸いであろう。今年が没後20年に当たる武満徹の作品もいくつかのオーケストラが演奏している。

### ●オーケストラのシェフたちの異動

新日本フィルではハーディングが退任、上岡敏之がR・シュトラウスの作品集で新音楽監督としての最初の定期(9月)を飾った。上岡のユニークな音づくりがこの楽団をどうリードして行くかが注目される。一方、創立60周年を迎えた日本フィルでは、楽団の演奏水準を建て直し、多大な功績を上げたラザレフが退任、若手インキネンがワグナー作品集による定期(9月)をもって首席指揮者を引き継ぎ、同団のレパートリーの拡大を期待させている。名古屋フィルでは4月に小泉和裕が音楽監督に就任、同月の「家庭交響曲」他による定期で、「シンフォニーを完璧に演奏できるオケ」の理想をスタートさせた。また大阪響は、斬新なレパートリーで特色を出した児玉宏が音楽監督を退任、4月よりベテラン外山雄三がミュージック・アドバイザーに就任しているが、彼の指導でアンサンブルは整備されると思われるものの、聴衆への清新度のアピールの点では課題を残している。この他、東京フィルが闊達な指揮で人気上昇中の若手パティストーンを10月より常任指揮者に迎えている。

### ●他の主要オーケストラの主な動向

N響は首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィの斬新なレパートリー開拓で快調な演奏を続けている。読響も常任指揮者カンブランのもとで好調な演奏水準にあり、桂冠名誉指揮者スクロヴァチェフスキによるブルックナーの「8番」(1月)、名誉指揮者ロジェストヴェンスキーによるショスタコーヴィチの「10番」(9月)でも畢生の名演を残した。東京響も音楽監督ノットのもとでリゲティ作品(4月)など斬新なプログラミングを展開、前音楽監督スダーンが指揮した「ファウストの劫罰」(9月)でも快演した。なお同曲は東京シティ・フィルも9月の第300回定期で常任指揮者・高岡健が取り上げ、これも見事な演奏としている。また東京フィルは特別客演指揮者プレトニョフによる「ペール・ギュント」全曲(劇詩/戯曲の台本併用、4月)をはじめ注目すべき演奏をいくつか残した。東京都響は音楽監督・大野和士のもとで意欲的にレパートリーを開拓し注目されているが、桂冠指揮者インバルの人気も相変わらず目覚ましい。各都市のオケでは、札幌は首席指揮者ボンマーのもとで安定

した水準にあり、客演の広上淳一によるショスタコーヴィチの「8番」(6月)などでも充実した演奏を聴かせた。仙台フィルは常任指揮者ヴェロとの東京公演における「幻想交響曲」(4月)で卓越した演奏を披露、山形響は音楽監督・飯森範親の指揮で聴衆との交流を重視した活動を展開し続け、群響も音楽監督・大友直人との東京公演「トゥーランガリラ交響曲」(3月)で均整の取れた壮麗な演奏を繰り広げている。セントラル愛知響は引き続き音楽監督スワロフスキーのもと、特に第150回定期をドヴォルジャークの「スターバト・マーテル」で気を吐いた(9月)。オーケストラ・アンサンブル金沢は井上道義・音楽監督時代に入って10年目、個性的なプログラミングを続けており、特に小編成の強みを利用した国内各地への積極的な進出は他の団体の真似できぬところである。

関西では、京都市響が目覚ましい演奏水準にあり、常任指揮者兼ミュージック・アドバイザー・広上淳一の手腕は高く評価されてよく、特に彼と高岡・下野の共同指揮でシュトックハウゼンの「グルッペン」を上演(12月)したのは快挙である。大阪フィルは首席指揮者・井上道義が第500回定期(7月)を成功裡に飾り、日本センチュリー響は首席指揮者・飯森範親が「ハイドン交響曲ツィクルス」でアンサンブルの整備に大きな成果を上げ、関西フィルも音楽監督デュメイ、首席指揮者・藤岡幸夫、桂冠名誉指揮者・飯守泰次郎の3人がそれぞれ良い味を聴かせている。佐渡裕が芸術監督を務める兵庫芸術文化センター管は相変わらず随一の集客力を誇る。広島響は秋山和慶が音楽監督・常任指揮者としての最後のシーズンを好演で飾りつつあり、九州響も音楽監督・小泉和裕のもとで柔軟な個性を磨いている。

### ●複数のオーケストラが共同で演奏会を

大阪の4つの主要楽団(前出)が同一ステージに集結して演奏を披露する「大阪4大オケの響演」は昨年に続くもの(4月)。またこの4団体はJR西日本との共同企画で、大阪環状線の専用貸切列車が一周する約45分の間に、抽選で選ばれた約200人の聴衆を前に4つの車両で各2~3人のアンサンブルが演奏するという「ぐるKAN4オケClassic」というイベントを実施した(9月)。オーケストラが広くアピールするための手段として注目されよう。また、神奈川フィルと名古屋フィルが、両楽団の指揮者を兼ねる川瀬賢太郎の指揮でショスタコーヴィチの「7番」を横浜と名古屋で合同演奏し、これも話題を集めた(6月)。

### ●来日オーケストラの話題から

ラトルとベルリン・フィルがベートーヴェンの交響曲ツィクルスを(5月)、パレンボイムとシュターツカペレ・ベルリンがブルックナーの交響曲ツィクルス(2月)を行なったが、特に後者は、来日オケとしては初の企画として貴重なものであった。またバーミンガム市響の公演は客演の山田和樹が、トーンキンストラ管の公演は音楽監督(楽団サイトにおける表記は首席指揮者)佐渡裕が指揮(5月)、いずれも久しぶりの日本人シェフの凱旋公演である。4月にはマリナーとアカデミー室内管弦楽団が来日公演を行なったが、マリナーにとってはこれが最後の来日となった(10月2日逝去)。

11月には大小7つの外来オーケストラ公演が集申するという現象を呈したが、その中ではティエレマンとシュターツカペレ・ドレスデンによる演奏会形式の「ラインの黄金」、ヤンソンズとバイエルン放響による入魂のマーラーの「9番」がハイライトであろう。バンベルク響もプロムシュテットの指揮で深みのある演奏を、パリ管も新音楽監督ハーディングの指揮で華麗な快演を披露した。いずれも名門オケの底力を示した趣の競演であった。